『小テストなんてくたばりやがれ』

風優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『小テストなんてくたばりやがれ』

【Ｎコード】

Ｎ３５４８Ｓ

【作者名】

風優

【あらすじ】

構造の攘夷組です。メインは高杉と先生と銀時。構造で久坂が加わってます。

（前書き）

構造の話ですので、ご注意。笑って許せる人のみ見てください。

俺の故郷に一つの寺子屋があった。そこは俺の第二の故郷でもある。

その寺子屋は最近先生が変わった。その先生と言うのが、素直さゆえに投獄され、ようやく出てきたらしい。なぜ投獄されたのかと聞けば、彼は笑う。

聞いてはいけない事だったのだろうかと不安になっていると、彼は俺の目線に合わせてしゃがんだ。少しだけ気恥しくなり、ふいっと視線をそらせば、彼はニパァと頬を緩ませるのだ。

「僕がどうして捕まったのか知りたいですか？　バレないようにうまく動く予定だったのですが、国の偉い人に見つかってしまったんですよ。いやー、失敗しちゃいましたね」

「……そうですか」

彼は捕まって投獄された事を何も気にしていないらしい。俺がなぜ捕まったのか考えていると、彼は勉学で解らない所はあるかいと尋ねて来た。

「あ、そういえば……少し解らないところがあるんです」

「ふむ、君の教科書は今あるのかい？」

「はい。ここに」

母親に買ってもらった少し高価な鞄を出し、そこから、いつも使う教科書を取り出す。先生の方針は自分の学びたい事を学べという物だ。先生も一緒になって学んでくれる。

教科書を渡し、先生にここが解らないと教える。先生は教科書の

文字を目で追って、ゆっくりとヒントを俺に与える。そのまま、教えてくれるのではない。生徒が解ってから、ゆっくりと真実を語るのだ。俺はそんな先生が好きだった。

俺があーでもこーでもないと悩んでいる姿を見て、先生は少しだけ嬉しそうにしている。解らない俺を馬鹿にしているのではなく、先生は悩む姿が重要だといつも言っている。苦労が解決すると、満足感を得られるそうだ。

ようやく、馬鹿な頭をひねって出した答えに先生は満足したらしい。俺に答えを教えてくれる。それはすっと頭に浸透して、静かに知識として蓄積される。

「君は生まれつき頭がよいのですね。ですが――」

先生が視線を俺から外した。その視線は寺子屋の中に移される。そこには寺子屋一の秀才とよばれる奴の姿がある。先生が言葉をつづけなくても、何を言いたいのか解る。

きっと、秀才の久坂はもっと頭が良いと言いたいのだろう。寺子屋に遅くまで残って、いつも勉強しているから。それに少しだけ、むかっとし、先生を見た。

「先生！　今日は俺帰ります！　馬鹿に今日は遊ばないって言っておいてください！」

「はい。期待してます。馬鹿って言ってはダメですよ」

すっげー、むかついた。先生が俺よりもあいつに目を止めている。俺は家に帰って今日の復習をし、予習をする事にする。寺子屋を後にしようと身を翻せば、見慣れたヅラが、「おい、どこに行くんだ？　今日は銀時と俺と遊ぶ予定だろう」と顔を出す。それすら無視をし、ズカズカと寺子屋を出た。

「高杉と遊ぶ予定だったのによぉ。あいつ、ぴゅーんって出て行っちまった」
「おや、小太郎とは遊ばないのですか？」

高杉が寺子屋を出て言った後、先生とよばれた男の元にふわりと一人の白い男の子が現れる。呆れたような、感心したような表情をし、やがて、男の子はふっと小さく笑った。

「高杉と久坂を激突させるつもりだな？」
「ばれましたか」
「あれ、大事になるぞ」
「いいのですよ。彼には才能がありますが、どうも、独りよがりな所があります」

そう笑った師に白い男の子は小さな笑顔で返す。
その次の日、テストで満点を取った高杉をほめちぎる先生の姿、そして、その一週間後には久坂が高杉の点数を抜くと言うちょっとしたトラブルがあったという。

白い男の子は配られたテストに深いため息をついた。

ヅラがテストは「どうだった？」と男の子のテストを見ようと覗き込んでくる。
クラスは高杉と久坂の話題で持ちきりだ。
「馬鹿じゃねぇの」
自分の赤点テストをぐちゃぐちゃに丸め、ゴミ箱に捨てた。
その翌日、男の子は先生に呼びとめられる。そして、高杉と同じ戦法に合い満点を取るとは思いもしなかった。

（後書き）

あとがき忘れていましたが、初めての銀魂小説を書かせていただきました。
攘夷組大好きです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3548s/

『小テストなんてくたばりやがれ』

2011年10月8日21時31分発行